



小豆島一日研修(大学入門ゼミ/1年次)



香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.4



教職実践演習(2016.11/4年次)

TOP NEWS

Topic-1 センター1階教科書コーナーに坂出高等学校の教科書を配架

本年4月、香川県立坂出高等学校に、県内で初めて、教員を志望する生徒対象の教職コース「教育創造コース」が設置されました。それに伴い、当センター1階の教科書閲覧コーナーに、従来配架されている香川・岡山の公立小・中学校ならびに本学附属小・中学校で採択されている教科書に加え、本年度新たに、坂出高等学校普通科教育創造コースで採択されている教科書を配架しました。坂出高等学校教育創造コースとの連携を図るとともに、高校教員を目指す学生のための学習資料として積極的な活用を期待しています。

Topic-2 フレンドシップ事業 平成28年度を以て終了に。

当センターがこれまで主管実施してきたフレンドシップ事業。当センターの事業精選等により、平成28年度が最終実施年度となりました。平成28年度は演習の場を近隣小学校2校の放課後児童クラブとし、2年次の履修学生10名が放課後の遊びや学習の支援者として子どもたちと関わり、子ども理解を深めました。

【特集】第17回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて	2
第17回 学部・附属学校園教員合同研究集会 研究グループ報告	3~6
第2期(10~3月)教育実践集中講座 実践報告	6
附属坂出小学校 第99回教育研究発表会 報告	7
第61回 附属幼稚園研究大会 報告	7
附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎 初等教育研究発表会 報告	8
平成28年度 センター公開講演会 報告	9
平成28年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告	9
退任のご挨拶/着任のご挨拶/寄贈図書	9~11
教職支援開発センター活動報告/教育実践総合研究(第36・37号)原稿募集	12

第17回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

附属教職支援開発センター センター長 七條 正典



平成29年2月27日（月）第17回学部・附属学校園教員合同研究集会が、611講義室・オリーブスクエアを会場に、173名（学部73名、附属学校園100名）の参加を得て、盛大に開催されました。



全体会の冒頭において、学部長の毛利猛先生からの挨拶があり、それに続いて「教免法の改正と今後の教育実習の課題」をテーマとして、附属教職支援開発センターの山岸知幸先生のコーディネートにより全体討論が行われました。全体討論では、まず、提案①「教員養成改革の全国的動向と香川大学教育学部の現状」について副学部長の野崎武司先生から、提案②「香川大学教育学部のカリキュラム改革と教育実習をめぐる現状と課題」について実地教育委員長の櫻井佳樹先生から、それぞれ提案がありました。

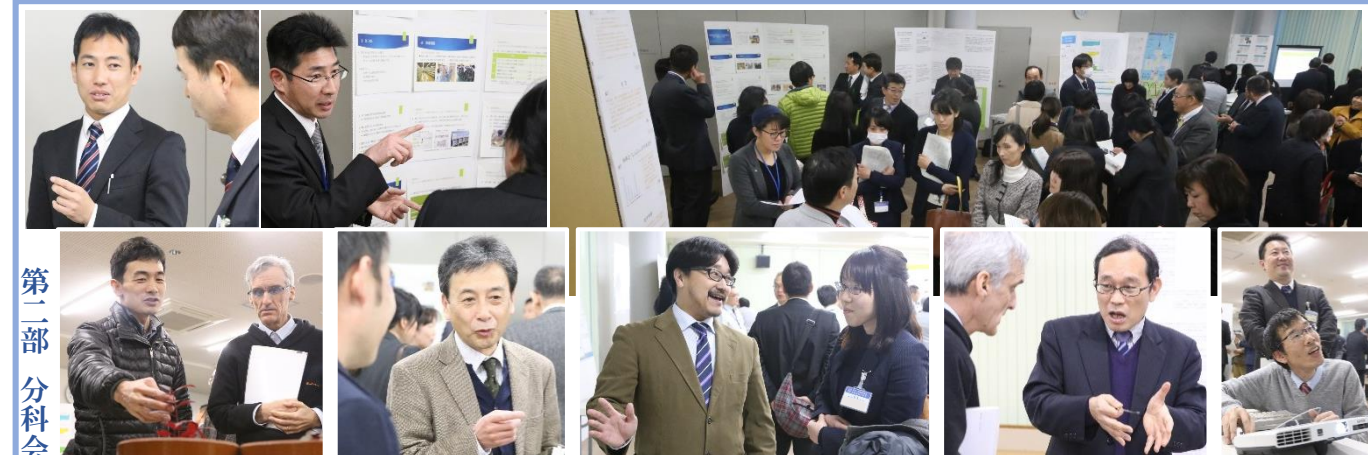


その後、指定討論者である附属高松小学校の和中雅子先生と附属坂出中学校の池下香先生から、提案についての意見や質問が出されました。短い時間の中で、会場からも質問や意見をいただき、今後、教免法の改正を受けて、教員養成改革及び実習の在り方を含めたカリキュラム改革に関して、附属学校園を含め学部全体でさらに具体的な検討を行っていくことが確認されました。全体会の閉会に際しては、附属高松小学校の米村副校長先生よりご挨拶をいただきました。なお、全体の進行は、附属高松中学校の増田一仁先生に務めていただきました。

この後の分科会では、オリーブスクエアを会場として、17の共同研究プロジェクトの成果発表があり、それぞれの場において熱心な意見交換がなされました。

その後、大学会館のソラミにおいて行われた懇親会には100名の参加があり、和やかで楽しい親睦のひとときを過ごすことができました。

第一部 全体会



第二部 分科会

① 小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究 ―アクティブラーニングを取り入れて―

佐藤明宏、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中、附属特別支援

今年は、特別支援を必要とする子どもの言葉の力を伸ばすための有効な教育方法としてのアクティブ・ラーニングに着目し、その研究に取り組んだ。アクティブ・ラーニングの視点はユニバーサルデザインの考え方と軌を一にする。そこで、研究を進めるために四つの視点 1 主体的な言語活動を設定する。2 論理的思考力を伸ばす深い学びを行う。3 協働的学びの方法を工夫する。4 学びのプロセスを自覚する。を設定し、特別支援を必要とする児童・生徒にアセスメントを行い、それに応じた学習の展開を図った。



② 異学年集団における発話パターンの変化と動機づけとの関連

岡田 涼、附属高松小

附属高松小学校では、平成25年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、「創造活動」を核とする教育課程の開発に取り組んでいる。本研究では、異学年集団で行われる縦割り創造活動での児童の発話パターンを検討した。児童は、他者の考えを取り入れて自分の中で処理する「交流的発話」を行いながら、話し合いを展開させていた。また、発話のパターンは、児童が協同的な学びに対してもつ動機づけのあり方によっても異なっていた。



③ 学習者の法意識の体系的形成を図る法教育教材の開発

―授業実践・教科専門・教科教育担当者の協働を通して―

鈴木正行、高倉良一、守田逸人、附属高松中、附属坂出中

本研究では、古代・中世から現代に至る法や訴訟、政策等を題材として、日本における法制度の歴史的変遷及び現代の法・ルールに関する教材開発を行い、学習者の法意識の体系的形成を図ることをめざした。そこで、中学校社会科における法に関わる内容について、①堀田永年私財法と律令国家体制に関する歴史解釈、②赤穂事件の処置と武家諸法度(坂出中大和田実践)、③公正な裁判と裁判員制度の是非(高松中小野実践)、④近代法におけるモラル・エコノミーの崩壊(鈴木実践)、⑤日本国憲法と大日本帝国憲法の断絶性と連続性、⑥外国籍生徒高校入試特別枠制度と多文化共生(鈴木実践)などを事例として取り上げた。このうち②・③・④・⑥については授業実践を行うことができたが、他の二つについては授業モデルの提案に止まっているため、機会を捉えて実践による検証を行いたい。当日の発表会では、事例①の授業モデルの実践上の意義と課題を中心に質疑・応答を行った。選挙権が18歳以上に広げられたことにより、学校教育を通じて主権者を育てることの重要性がこれまで以上に高まっている。今後、さらに研究を深化させていきたい。



④ 「遊びの質」の相互理解を促す保育アセスメントモデルの検討

松本博雄、附属幼稚園

子ども向けクラスだより「〇〇ぐみしんぶん」によるアクションリサーチの3年目として、今年度は保育実践の成果と課題について保護者との共有・相互理解という観点から、本アセスメント方法の効果と課題について検討を行った。その結果「しんぶん」は保護者の保育実践への関心を高め、自分の子どもはもちろん、他児の遊びをも話題にするきっかけとなること、また「しんぶん」は、保護者に対し日々の保育を説明する機能に加え、保護者と子どもの会話を通して遊びを支え盛り上げることを可能にすることが見出された。当日は学部教員からも熱心な質疑があり、「しんぶん」の効果について改めて実感する場となった。(写真: しんぶんをみる園児、保護者、保育者)



⑤希少糖・ズイナの教材化に向けた基礎的研究

北林雅洋、附属高松小、附属坂出小、附属高松中

香川大学発の研究成果として注目を集めている希少糖と、自然界で希少糖を作る植物として唯一のものとされているズイナについて、小・中学校の理科と総合的な学習の時間および小学校の生活科において活用可能な教材の開発をすすめるための、基礎的な調査・研究を本研究では行った。合同研究集会では、次の内容を発表した。(1)ズイナを栽培して(教育学部生活・総合領域 学生・教員)、(2)ズイナ(*Itea japonica*)の分布状況と配布されている「ズイナ」(*Itea virginica*)の名称について(教育学部 篠原渉)、(3)小学生の体験活動から(附属高松小学校 山西達也)。「ズイナの葉から希少糖を取り出して見たかった」というのは、小学生が「もっとやってみたかったこと」として挙げていることであり、発表を聞かれた多くの方の感想でもあった。今後の重要な課題である。

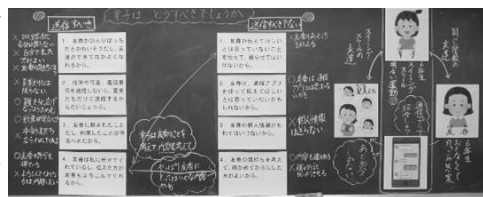


⑥情報モラル教育に関する道徳授業実践

～開発教材の問題解決的な学習による実践を通して～

植田和也、附属高松小、附属坂出小

今年度は、SNSに関する内容「友香のために」(内容項目:「友情、信頼」と「規則の尊重」)や電子マネーに関する内容「見えないおかね」(内容項目:「思慮・反省、節度・節制」)の教材開発を行った。さらに、指導案作成を行い、附属坂出小学校で「友香のために」を問題解決的な学習として、清水教諭が授業実践を行い、児童の反応等について報告した。今後も実践における教材の改善や効果的な活用、教科等と関連を図った単元構想についても検討していく。



⑦数学科授業研究における順序思考・俯瞰思考の役割

佐竹郁夫、附属坂出中

中学生のときには数学の成績もそれなりで高校に進学したが、高校でさっぱり数学がわからなくなり、落ちこぼれてしまったという話をよく聞く。我々は、中学生の時点での数学学習において、成績には現れていない何らかの兆候があり、これが高校での数学学習において発現したのではないかという仮説を立て、中学生生徒の数学に対する時間軸に沿った意識の変遷および数学学習における思考の癖を探るべく、アンケートを行った。

⑧保健科教育における現代的課題とアクティブラーニング

宮本賢作、附属高松中

保健科教育の課題として、健康課題を発見し、習得した知識を活用して課題解決する学習が不十分で、子供の論理的な思考力の育成に課題があることが指摘されている。今回、課題解決学習を中心とした授業実践を通して、保健に対する意識の変化と、ALの3つの視点に基づく学びの成果を評価した。生徒は健康アドバイザーとして被験者(教諭)の生活習慣に関する記録や質問紙等をもとに個々の課題を発見し解決策を提案するグループ学習を実施した。その結果、保健に対する意識の変化は学習の前後で概ね改善傾向がみられたが、ALの主体的な学びに対する成果にグループ間の差がみられた。今後更にALの成果を向上させるプログラムの考案を進める。



⑨国語科アクティブ・ラーニングにおける思考ツールの有効性についての研究

—書くこと・読むことを中心に—

山本茂喜、附属高松中

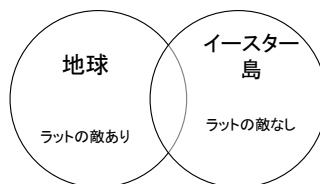
我々はこれまで継続して、思考ツールを活用した国語学習のあり方について実践研究を行ってきた。今年度は、問題解決ボックスとマンダラマップなどの思考ツールを活用した読むこと・書くことの指導の方法について共同研究を行った。これまでの成果をもとに、新指導要領に対応した『思考ツールで国語科アクティブ・ラーニング(仮題)』(東洋館出版社)を近々上梓する予定である。これまでのご支援に深く感謝する次第である。来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと考えている。



⑩アクティブ・ラーニングにおける「思考ツール」の活用の研究

山本茂喜、附属坂出中

今年度は、思考ツールの内、特にベン図を活用した国語学習の方法について共同研究を行った。今回の実践では、特に「批判的な読み」(クリティカル・リーディング)における思考ツールの有効性が明らかになった。これまでの成果をもとに、新指導要領に対応した『思考ツールで国語科アクティブ・ラーニング(仮題)』(東洋館出版社)を近々上梓する予定である。共同研究の成果としては三冊目の出版となる。これまでのご支援に深く感謝する次第である。来年度以降もさらに共同研究を深化させるとともに、新たな研究書を出版したいと



⑪児童の援助行動に注目した鬼ごっこの体育授業における実践

上野耕平、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中

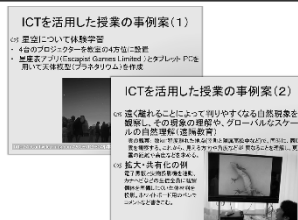
本研究では、児童にとって身近な運動あそびである「鬼ごっこ」を取り上げ、鬼ごっこに含まれる「援助行動」を通じて、児童の援助自己効力感(人を助けることができるだろうという予期)を高めることを目指した実践を行った。援助行動の促進要因の一つとして「過去の援助経験」が挙げられている。本研究で開発したなかま鬼は、最後まで逃げ切れることなく、沢山の児童を助けられることが技能の卓越を示すルールになっている。本研究の結果、たとえ運動あそびであっても援助経験を重ねることで、普段の学校生活場面での援助行動を促進できる可能性が窺われたことから、今後援助経験の内容について研究を深めたいと考えている。



⑫ ICTを活用したアクティブ・ラーニング教材開発

高木由美子、附属坂出中

附属坂出中学校での実践研究、アクティブ・ラーニング支援システムの紹介、大学との連携による実践事例の可能性について検討した。ICTを活用した授業の事例案について紹介した。また、企業と意見交換して作成したアクティブ・ラーニング支援システムの紹介を実施していただいた。1. かんたん動画コンテンツ作成、2. 視聴履歴が確認できる 3. 生徒一人一人の学習をサポートできるなどの特徴がある。



⑬生活科と他教科との接続・発展を図る授業構成に関する研究

伊藤裕康、附属高松小

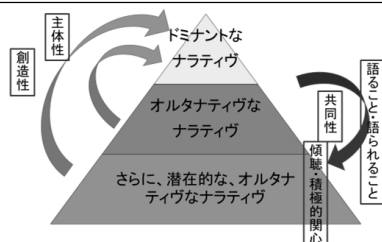
主体的・協働的に学ぶ学習が求められ、自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識を高める必要性が言われている。これらは、生活科が一貫して重視してきたことである(野田2015)。全国学力・学習状況調査結果から、総合的な学習の趣旨に即した学習活動に取り組む子どもほど、平均正答率が高いことが明らかとなった。近年、総合的な学習の時間及びそれと深く関わる生活科が再評価される(田村2015)。今後、他教科・領域との接続を踏まえた生活科授業構成が求められるとともに、他教科・領域でも生活科との接続・発展を図る授業構成が求められてこよう。そこで、社会科を中心に、生活科との接続・発展を図る授業のあり方に関する基礎的知見を得た上で、生活科との接続・発展を図る授業モデルを提示することを目的に、研究を進めた。集会では、生活科との接続・発展を図る授業のあり方に関する基礎的知見を得るために行った、生活科と社会科との接続・発展に関わる研究の動向を報告した。

⑭「物語り(ナラティブ)」の観点からみた教育実践の理解と

ナラティブ・エデュケーション(NF)の開発

竹森元彦、附属高松小、附属坂出中

附属坂出中学校では「ものがたり」を用いた授業実践とその理論化をこれまで積み重ねてきた。「ナラティヴ」とは、「ものがたり」の生成に関わる、人が生きていく上で世界を理解するうえで必要な考え方や内的枠組みである。本研究は、ものがたりづくりを重視した3名の教育実践(総合学習、国語教育、理解教育)を、「ナラティヴ」の観点から読み解き、「ナラティヴ・エデュケーション」という概念を構築する試みである。多くの意見を頂き、自由な場づくり、「無知の姿勢」、「仕掛け」と仕掛けること、語りに求められる「聴き手」ドミナントなナラティヴとオルタナティブなナラティヴの関係と主体性・創造性・共同性(傾聴関係)の発生機序、「ドミナントなナラティヴ」を超えるための4段階等を示した。アクティブ・ラーニングの核とも言える。研究成果として「ナラティヴ・エデュケーション入門」(美巧社)という手引書を作成した。多くの方々のご支援に感謝すると共に、さらなる共同研究として展開したいと考えている。

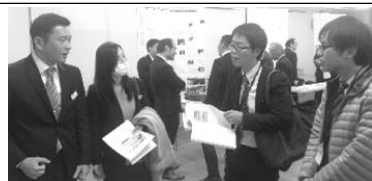


15 初等・中等教育におけるプログラミング学習システムの試作

～2020年度プログラム教育必修化に向けて～

宮崎英一、附属高松中、附属坂出中

現在、文科省は小学校でのプログラミング教育必修化を検討しているが、プログラミングの専門性を有した教員やその環境が不十分な状態では学校現場の負担が大きい。そこで初学者向けに多くの教育現場で実践例の多い「Scratch」を元にセンサが簡単に制御可能なプログラミング教材の開発を行った。その結果、各附属の先生方から教材としての可能性有との示唆を頂いたが、現状では内容的に不十分であり、更に改良を行う必要がある事も示された。



16 技術化教育法・内容学演習における学生と現職教員との協働による授業の研究

黒田勉、附属高松中、附属坂出中

昨年度に引き続き、教員自主研修会「ねじ会」の活動報告と、その時に製作した製作品の展示を行った。今年度も、活発な討論・議論が行われ、技術分野の意識拡大につながったと考えている。

17 特別支援学校高等部における概数理解を促す「職業数学」の開発

恵羅修吉、附属特別支援

これまで概数理解が難しいと思われていた知的障害のある生徒であっても、概数能力を使用する機会を設定すれば、理解が深まり活用を促すことができる。高等部卒業後、作業効率や時間を意識して仕事を行うためには、生徒自身が意識的に概数能力を活用できるように促すと同時に、実習先や就職先との連携によって学習内容や支援方法を引き継ぎ、個に即した配慮を導入する必要がある。この点について実りある協議をすることができた。



第2期(10～3月)教育実践集中講座 実践報告

プロの教師とは何か? ～教師になるあなたへのエール～

附属教職支援開発センター客員教授 大山 修・北堀 宏・岡 静子

〔第1回〕 10月21日(金) 教職実践演習 「いじめと体罰」(大山) 「教員としての倫理観」(岡)	〔第6回〕 11月25日(金) 教職実践演習 「いざ、学校へ」(大山・岡)
〔第2回〕 11月7日(月) 教職概論(イ) 「学校について理解しよう」(大山)	〔第7回〕 12月8日(木) 生徒指導論A 「小学校における生徒指導上の実際」(岡)
〔第3回〕 11月9日(水) 教育実践演習A 「教育実習を振り返って」(北堀・岡)	〔第8回〕 12月12日(月) 教職概論(イ) 「授業について考える」(北堀)
〔第4回〕 11月14日(月) 学級経営論(ロ) 「学級で育つ子どもたちのために」(岡)	〔第9回〕 12月14日(水) 人権教育 「小学校の人権教育について」(岡)
〔第5回〕 11月21日(月) 教職概論(イ) 「教職を知る 教職の魅力」(岡)	〔第10回〕 1月23日(月) 道德教育論(ロ) 「子どもの心を耕す道德の授業」(大山)
	〔第11回〕 3月1日(水) 卒業前直前対策講座 「4月からの心がまえ」(岡)

11月9日(水)教育実践演習「教育実習を終えて学んだこと」は、印象深い講座でした。それまでの講座は、おしゃれな服装に身を包んだ学生、部活のジャージなど軽装の学生等が入り交じり大学の授業らしい自由で穏やかな雰囲気でした。ところがこの日の受講生は男女とも全員がスーツでびしっと決めており、教室に緊張感が漂っていました。中には数か月後に県内外の教壇に立つ予定の方もいらっしゃいました。

附属幼・小・中・特別支援学校での実習を経験した代表の学生が、学んだことや今後の課題をエピソードも交えて熱く語っていききました。中には短い時間でも話に引き込ませる術を身に付けている学生もあり、恥ずかしながら自分の学生当時と比べて、より多くの視点で深く学んでいる学生の資質・能力の高さに驚きました。代表学生のまとめの中では、「教材研究の大切さ」や「児童生徒理解の難しさ」といったキーワードが多く聞かれました。

学校教育に過度の期待が寄せられ要望も多様化する中、教員を目指す学生を後ずさりさせている現状があります。しかし、子どもたちと自分なりに懸命に生活した日々は、私の人生を豊かにしてくれ、教員を選んだことに後悔はありません。この度、出会った学生の皆さんが香川大学を巣立ち、教師として真摯に子どもたちと向き合い、それぞれの人生を歩んでくださることを心から期待しています。

＜研究主題＞

学びに熱中する子どもの育成 ー学習意欲を育て、他者と協働しながら考え続ける力を育む授業づくりー

1 研究会の概要

香川大学教育学部 附属坂出小学校

平成29年1月26日（木）、27日（金）に、第99回教育研究発表会を開催いたしました。各教科および道徳の時間、計18の授業を公開しました。また、東京大学大学院教授の市川伸一先生、文部科学省の澤井陽介先生、水戸部修治先生、笠井健一先生、鳴川哲也先生、香川大学の七條正典先生、坂井聡先生、植田和也先生より、専門分野において今求められる授業づくりについてのご講演をいただきました。そしてその後は、市川先生、笠井先生、坂井先生をシンポジストに迎え、第6学年算数科の全体授業を基に、「学びに熱中する子どもの育成」について、活発な話し合いが行われました。



【全体授業（6年・算数科）】

2 研究主題について

今回の学習指導要領の改訂では、学習の内容と方法の両方を重視し、子どもの学びの過程を質的に高めていくことを目指しています。本校では、生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう、学習意欲を育てることに主眼を置き、子どもたちの問題意識を大切にしながら単元および題材構成を工夫してきました。また、子どもたち一人一人が学び方を学び、自らの力、あるいは友達と対話しながら課題解決に向かうことができるよう、学習意欲への働きかけを開発してきました。



【課題解決に向けて対話】

3 成果と今後の方向

ご参会の方々より、「子どもが課題意識をもって意欲的に取り組むこと、子ども同士が主体的に学び合うことは授業の基本として大切にしたい。」等のご意見をいただきました。一方、「学習意欲は見えにくく評価しにくいので、見取る視点を明確にもっておくことが大切。」等、次年度研究に向けたご示唆も多くいただくことができました。

今後は、継続して「学びに熱中する子どもの育成」を目指すとともに、子ども一人一人の学習意欲を育てていけるよう、さらに単元および題材構成の工夫、働きかけの開発に取り組んでいきたいと考えています。



【学びに熱中する姿】

第61回 附属幼稚園研究大会 報告

研究主題 ～つながる～ 子どもたちの生活を支えるⅡ

1 研究会の概要

香川大学教育学部 附属幼稚園

1月27日（金）に第61回附属幼稚園研究大会「つながる子どもたちの生活を支えるⅡ」をテーマに子どもの体験と体験のつながりについて、保育実践研究の発表をした。県内外から約220名のご参会者と共に分科会での協議、大宮勇雄先生のご講話を通して学びの機会となった。

2 研究主題について

体験の一つ一つのつながりとその過程における子どもの体験の意味と学び、それらを支える教師の援助を探ることを目的とした。

①子どもの一つの体験における内面の育ちを支える体験の意味や学び ②体験のつながる過程で得られる体験の意味や学び ③豊かな体験を支える教師の援助 の3つを主に探ってきた。保育記録を基にして子どもや遊びの理解を深め、日々の保育カンファレンス(事例検討など)から、「生活を支える保育」を考えている。



友達と考えながら遊びの場をつくる



思いを伝えながら友達と遊びへ

3 研究の成果・課題

体験の意味の一人一人の違い、遊びにおける違いを意識して「体験」を見つめる重要性を認識した。体験の深まりある連続性、葛藤や戸惑いなども心の育ちに大切であり、遊びや生活を通した「体験」には目に見えない心情(社会情動性)を育てていくものが多様に含まれていると考え、適切な援助を考えていく基盤となった。

幼児期の充実した生活を支えるために、「体験の長期的な育ち(学び)の過程のとらえ」、「個と集団の体験のつながり」について、今後も研究実践を深めたい。



福島大学 教授 大宮勇雄先生
「幼児期に大切にしたいこと」



年齢別分科会 グループで話し合い深める



香川大学教育学部 附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎

2月2、3日に開催した「初等教育研究発表会」には全国から多くの方々にご参会いただき、盛会裏のうちに終了することができました。学部の先生方には、ご指導・ご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、学生の皆さんにも協力していただきました。ありがとうございました。

【附属高松小学校】

本校は、平成25年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。「分かち合い」とは、学習の主体としての子どもが、自らをメタ認知しながら、共に生きていく他者と互いの見方・考え方に共感し、認め合うことであり、その過程で、共に学ぶ価値を実感していくと考えています。つまり、なりたい自分を心に描き、自分にとっての問題を認識し、仲間と共に試行錯誤しながら積極的に問題を解決していこうとする中で、自信をもち、主体的に「ひと・もの・こと」に働きかけることだといえます。「分かち合い、共に未来を創造する子ども」に必要な資質・能力として3つの力を設定し研究を進めてきました。

○夢や憧れをもち、自律的に **学び続ける力** ○「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に **関わる力**
○問題を解決し、知や価値を **創造する力**

そこに向かうためのカリキュラムを「見方・考え方を育む教科学習」と「生き方・在り方を深化する創造活動」の2領域から構想しました。また、2領域で資質・能力を育むために、子どもたちが主体的に学ぶことができる授業の在り方を検討し、3つの授業づくりの「しかけ」(志向・共感や協同・有用)の重要性も確認できました。

さて、初等教育研究発表会では、このような新カリキュラムに基づき、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を考え、目指す子ども像に向かう授業づくりについて検討することによって、教員の教育観・指導観が変容し、子どもやその事実に対する謙虚さや、授業に対する誠実さを学ぶ契機となりました。今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。



主体的、共感・協同的、創造的に学ぶ子どもたち

【附属幼稚園高松園舎】



幼小交流「ようこそ おにランドへ！」

今年度の研究テーマ「能動性を発揮する教育課程—PART II—」のもと長期・短期指導計画について“能動性の発揮”をキーワードに見直しを図り、「高松園舎の教育」を新たに刊行しました。

当日は4・5歳児の「節分の日」と5歳児・1年生との幼小交流活動「おにランド」の製作活動の様子を公開しましたが、県内外から多数の参会者がありました。保育討議では能動性を発揮する行事の在り方や記録と計画の連続性などについて活発な意見がよせられました。

講演では、白梅学園大学の無藤 隆先生より、今後の幼児教育について具体的な事例を交えてお話しいただき参会者からも好評でした。

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けると共に、実践を通して提案していきたいと考えています。今後とも、ご助言・ご支援の程、よろしくお願いいたします。

第1回

豊かな心を育む学校づくり

講師：高知大学大学院非常勤講師 田邊重任 先生



第17回 学部附属教員合同研究会
研究グループ報告

研究グループ報告

第2回

地域に根差し世界に飛び立つ子どもたちを育てよう

—「特別の教科 道徳」を要として—

講師：昭和女子大学教授 押谷由夫 先生



第2期 教育実践集中講座 実践報告
研究グループ報告
第99回教育研究発表会 報告
第61回 附属幼稚園研究大会 報告

平成28年度 センター公開講演会 報告
平成28年度 センター協議会報告/退任のご挨拶
附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎
初等教育研究発表会 報告

退任のご挨拶・着任のご挨拶
寄贈図書

平成28年8月6日(土)午後、研究交流会・第1回公開講演会を、昨年度に引き続き、香川大学教職大学院・香川県教育センター・松楠会との共催により、本学オーリーブ・スクエアにて開催しました。(詳細はセンターニュース前号(No. 3)1頁「TopNews」をご覧ください。)

平成28年12月10日(土)、香川県教育センターにて第2回公開講演会を行いました。本講演会は、当センターと香川県教育センターならびに香川大学教職大学院の共催により、香川県教育センターで開催する方法で実施しました。

講演会では、小・中・高等学校の教員、県内教育関係者、教育関係機関の関係者、本学教員だけでなく、東京、岡山や四国内と県外からの参加者が15名で、合計120名の参加となり、第1回講演会に続き会場は満席状態となり、道徳教育への関心の高さが実感されました。

講演は「地域に根差し世界に飛び立つ子どもたちを育てよう—「特別の教科 道徳」を要として」の演題で、配布資料に基づきながら丁寧に分かりやすく、聴衆を魅了する内容でした。特に、教科化に向けて道徳教育の5つの課題を挙げながらポイントを解説いただき、好評でした。特に、情報モラルに関する内容や評価に関わる点は、参加者の関心も高いことから、事例を示しながら整理し、講演いただきました。参加者のアンケートからも、本企画に対して教科化に向けた学校教育の課題に応える内容であり、有意義な研修の場となったと賞賛の声をいただきました。(文責：植田和也)

平成28年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

第90回協議会は、平成29年2月14日(火)、東京学芸大学を会場として開催されました。平成28年度の夏の協議会が台風の影響により急遽中止になったため、そこで予定されていた内容(各大学センターの実践や直面している課題)を、今回の協議会で意見交流与討論というかたちで進めることになりました。事務局を含めると80名を超える参加者があり、各センターが情報収集及び意見交流の場として本会に期待をもって参加している様子がうかがえました。

午前中の総会を終え、午後からの全体会では、大阪教育大学、上越教育大学、琉球大学より話題提供があり、教職大学院の状況、センターの学内での役割と学外(県教委等)との連携の中での役割について意見交流が行われました。どこの大学でも「人」不足が深刻であり、その中で、とりわけ学外との連携という役割を担うセンターの在り方について議論が進められました。本学においても同様な状況であり、専任教員減少の中で、授業をはじめとする学内業務の増加への対応、また、県センターとの連携による「養成—採用—研修」の一体化という課題にどのように関わっていけばよいのか等、考えさせられました。

次回の国立大学教育実践研究関連センター協議会は、本年9月に島根大学で開催予定です。

(文責：山岸知幸)

退任のご挨拶

■学び続ける大切さ ～感謝の気持ちを込めて～

香川県教育委員会事務局義務教育課 北堀 宏(前・附属教職支援開発センター客員教授)

わずか1年間でしたが、教育学部の教壇に立たせていただきました。時には数百人を前にしての講義は、教職を志す学生の真剣な姿勢に圧倒されるとともに、力不足を痛感する時間でした。「教師主導から子ども主体の授業への転換」が求められる中、講義自体を「学生主体の授業」とすることを目指しました。大学の先生方のような深い知見を持ちえない私にできることは、「子どもの立場に立って授業をつくる」とはどういうことか、講義の中で学生自身に実感してもらうことではないかという思いでした。十分なことはできませんでしたが、この経験を生かして私自身、今後も学び続けていきたいと思えます。本当に、ありがとうございました。

■分かち合い、高め合えた3年間

米村博司(前・附属高松小学校副校長)

附属高松小学校では、文科省研究開発学校としての指定を受け、その中で新たな同士と巡り会えたこと。また、子どもたちとともに分かち合うことの大切さを確かめ合えたこと。さらには、県内外の多くの先生方と出会い、たくさんの方が学べた3年間でした。

私は4月から日本を離れ、ジャカルタでの生活が始まりました。ジャカルタ日本人学校は、児童生徒数が約1,200名であり、世界で2番目の大規模校です。これからもジャカルタで暮らす多くの方々と、国境を越えて「分かち合う心」「分かち合う言葉」「分かち合う姿」等、附属高松小学校で培った『分かち合い』を大切にして尽力したいと思います。

3年間、本当にありがとうございました。今後も香川大学をはじめ、附属学園の益々の発展をご祈念申し上げます。

■センターに感謝

若井健司（前・附属坂出小学校長）

附属教職支援開発センター、所属の先生、職員の方々には、在職中大変お世話になりました。2年間ではありましたが、皆様のご支援を得て、附属坂出の小学校、幼稚園の校園長の職務を何とか終えることができました。センターは、附属学校にとって教育・研究上の大学への窓口であり、心強い協力者そして、信頼できる相談相手・パートナーでもありました。また、大学生と附属校園のつなぐ重責も担っていただき感謝しています。今後は、大学にて附属学園での経験も、教員養成課程の学生の教育・指導に活かし、より良い教育者の育成に尽力して参りたいと思います。

■ありがとうございました

宇多津町立宇多津北小学校 倉野晴代（前・附属幼稚園副園長）

附属幼稚園でお世話になった年数を合わせると、11年。長いようで短い充実した月日でした。幼稚園では、毎日子どもたちに元気と笑顔をもらい、「子どもの遊び・生活」の楽しさ・不思議さの深いことに心動かされてきました。幼児と生活をつくることの大切さ、すばらしさを実感しています。子どもたちの育ちを共に見つめてきた保護者の方々とのつながり、保育実践について考え歩んできた教職員との語り合いは、かけがえのない宝物です。そして実践研究へのアドバイスをしてくださった大学の先生方には、子どもの姿から学び続ける楽しさ、大切さを教わりました。支えてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

どうもありがとうございました。今後の附属学園の充実、ご発展をお祈りしております。

■過去と現在と未来と

香川県教育センター教職員研修課 高木 愛（前・センター運営委員）

交流人事教員として、母校香川大学で3年間勤務しました。在任中は、センターの皆様には様々な面で支えていただき、大変感謝しております。ありがとうございました。今の教育学部は、私が在学していた頃と比べると教職支援が充実しており、センターが要となり各関係機関が機能していることを、学生の4年間の成長から実感しました。香川の、日本の教育を担う若い力がすくすくと伸びていく様は、清々しいものがありました。

4月からは、香川県教育センターで教員の研修に関わっております。この3月に別れた卒業生に4月の研修の場で再会でき、喜びも一入でした。これからは、大学で育った若い先生方が学校現場で活躍できるよう、研修等でサポートしていけたらと考えております。

着任のご挨拶

■香川で“ときめく”教員ライフの実現を！

附属教職支援開発センター客員教授 東条直樹

これまで県内の小学校で20年間勤務しました。教育現場を離れ、教育行政に携わるようになって3年目です。現場にいたときは楽しいことも辛いこともありましたが、子どもたちの輝く笑顔や夢に向かって頑張っている姿からエネルギーをもらい、充実した日々を送っていました。現在は、自分の業務の延長線上に現場の先生方や子どもたちの夢や笑顔があることを想像しつつ仕事に取り組んでいます。

今回いただいた任務は、私自身が教師を目指していたころや教師になったばかりの頃の気持ちを取り戻す良い機会になると考えています。これまでの教師経験の中で、上司や同僚、保護者の方等から教えて頂いたことを、学生の皆様にお伝えしつつ、私自身も初志に戻り、学生の皆様とともに、香川で“ときめく”教員ライフの実現につなげていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

■戻ってまいりました

附属高松小学校副校長 倉沢 均

この度の異動で高松市立国分寺北部小学校から、副校長として着任いたしました倉沢均です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

私は、平成7年4月から平成17年3月までの10年間、本校で勤務しておりました。当時も大学の先生方のご指導やご協力を得ながら研究を進めておりましたが、当時お世話になった多くの先生方と再会することもでき、うれしく思っております。

すばらしい子どもたち、保護者、教職員に囲まれて、よりよい教育の在り方を追究する楽しさを存分に味わいたいと思っています。ご指導、ご助言をどうぞよろしくお願いいたします。

■ごあいさつ

附属坂出小学校長・附属幼稚園長 小西憲一

平成29年4月1日付で附属坂出小学校長・幼稚園長を命ぜられました。出勤初日から大小各種の会でひたすらご挨拶申し上げ、翌日は終日教育委員会行脚、そして始業式・入学式・入園式といった4月当初の重要行事を、周りの有能な方々に支えられて何とか乗り切り、今は少し落ち着いたところです。幼稚園では早速園児に遊んでもらったり、元気に挨拶してくれる小学生たちに接したりと、この仕事ならではの喜びも感じております。早く環境や仕事に慣れて、少しでも貢献して参りたいと思います。

今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

■再会に寄せる思い

附属幼稚園副園長 桑原育子

この度、平成29年4月1日付で、附属幼稚園の副園長として勤務することになりました。十年の月日を経て、再びお世話になっております。

砂場で大きな山やコースをつくったり、花びらを水に浮かべて色水をつくったり、大勢の友だちとサッカーボールを追いかけたり、あの頃と変わらない元気な子どもたちのいる幼稚園の風景に、心が躍る毎日です。

一方、十年前にはなく、新しくできていたものもありました。それは、毎週末に行われる職員全員での保育の振り返りの時間です。（研究日は別日にあります。）そこでは、若い先生、講師の先生、養護の先生、そして事務の方がいっしょに、一週間の子どもたちの育ちを振り返ります。特に、それらをつなぎ合わせて、次週の保育の環境設定への考察へと誘（いざ）なうベテラン教師の姿は圧巻です。すばらしい同僚性が存在する附属幼稚園との再会に、心から感謝し、精一杯努力して参ります。

今後とも、大学の先生方のご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

寄贈図書(2016/04/21~2017/05/20)

第17回
学部附属教員合同研究集会
研究グループ報告

研究グループ報告

第2期 教育実践集中講座 実践報告
研究グループ報告
第61回 附属幼稚園研究大会 報告

平成28年度 センター協議会報告/退任のご挨拶
附属高松小学校、附属幼稚園高松園舎
初等教育研究発表会 報告

退任のご挨拶・着任のご挨拶
寄贈図書

研究紀要 第43号 平成28年	広島県立教育センター
群馬大学教育実践年報 第5号 2015年	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
平成27年度群馬大学教育学部教員養成FDセンター推進プロジェクト 報告書 平成28年(2016年)3月	群馬大学教育学部教員養成FDセンター運営委員会
広島国際大学心理臨床センター紀要 第14号 2015	広島国際大学心理臨床センター
鳥取大学教育研究論集 第5号 2015年	鳥取大学 大学教育支援機構 教員養成センター
鳥取大学教育研究論集 第6号 2016年	鳥取大学 大学教育支援機構 教員養成センター
佐賀大学教育実践研究 第33号 2016	佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター
平成27年度大学革命シンポジウム 宇都宮大学のチャレンジ ～地域と大学の支え合い～ 報告書 平成27年12月12日	国立大学法人 宇都宮大学 教職センター
教育実践研究紀要 第16号 平成28年3月(2016.3 No.16)	京都教育大学附属教育実践センター機構教育支援センター
心理相談研究紀要 第14号 2015年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
学校教育実践学研究 第22巻 2016	広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター
平成27年度広島大学教育学部フレンドシップ授業 ゆかいな土曜日 実施報告書 平成28年度3月	広島大学教育学部フレンドシップ事業運営委員会
埼玉大学教育学部附属 教育実践総合センター 紀要 NO.15 2016	埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
熊本大学 教育実践研究 第33号 2016	熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
2015(平成27年度)熊本大学教育学部フレンドシップ事業 実施・成果報告書 2016(平成28)年3月	熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第38号 平成28年3月	秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター
心理臨床事例研究 愛媛大学心理教育相談室紀要 第12号 2016年4月	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター 心理教育相談室 愛媛大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻 臨床心理学コース
千葉大学教育実践研究 第19号 平成28年3月	千葉大学教育学部附属教員養成開発センター
琉球大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第22号 2015	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
琉球大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第23号 2016	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する 実践報告書(20) 平成28年3月20日	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
愛媛大学教育実践総合センター 紀要 No.34 2016	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
札幌学院大学心理臨床センター紀要 第16号 2016年7月	札幌学院大学心理臨床センター
日本女子大学教職教育開発センター 年報 2014年度 第1号	日本女子大学教職教育開発センター
日本女子大学教職教育開発センター 年報 2015年度 第2号	日本女子大学教職教育開発センター
琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要 第7号 2015	琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター
島根大学教育臨床総合研究 2016 Vol.15	島根大学教育学部附属教育支援センター
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第25巻 2016	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 特別号 6号 2016	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
ルーテル学院大学 臨床心理相談センター紀要 2016 Vol.9	ルーテル学院大学付属臨床心理相談センター
研究成果報告書サマリー集(平成27年度終了課程) 平成28年5月	独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
大阪大谷大学 教職教育センター紀要 第7号 2016年3月	大阪大谷大学教職教育センター
教育実践研究 第42号 平成28年9月	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第16号 2016年	国立大学法人 横浜国立大学
教育方法学研究 日本教育方法学会紀要 第41巻 2015	日本教育方法学会
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 第11号 平成28年12月	富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター
鳴門教育大学 学校教育研究紀要 No.31	鳴門教育大学 地域連携センター
群馬大学 教育実践研究 第34号 2017年3月	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
平成28年度 岡山大学大学院教育学研究科 岡山大学教育学部・岡山大学 教師教育開発センター 岡山県教育委員会 岡山市教育委員会 連携協力事業研究報告書	岡山大学 大学院教育学研究科、教育学部、教師教育開発センター
東京学芸大学 教育実践研究支援センター紀要 第13集 2017年3月	東京学芸大学教育実践研究支援センター
山形大学 教職・教育実践研究 第12号 2017年3月	山形大学地域教育文化学部附属教職研究総合センター
中等教育研究紀要 第63号 2016	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報 第30号 2016年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室
京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター研究報告書 第4号 平成28年度(2016)	京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター
花園大学 心理カウンセリングセンター研究紀要 【第11号】 2017	花園大学 心理カウンセリングセンター
教育実践総合センター紀要 No.34 2016	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート 第36号 2016年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター研究紀要 第42号 2016年	山口大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター研究紀要 第43号 2017年	山口大学教育学部附属教育実践総合センター
学部・附属教育実践 研究紀要 第16号 2017年3月	山口大学教育学部
還 平成28年度「ちゃぶ台方式」教職研修部授業報告書	山口大学教育学部
パイディア 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 Vol.25 2017	滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター紀要 2017.3 第16号	長崎大学教育学部附属教育実践総合センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 研究年報 Vol.16 2017.3	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 第17回シンポジウム記録集 これからの学校教育と教員養成カリキュラム アクティブ・ラーニングと教師の力量 小学校理科を主題に	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
広島国際大学心理臨床センター紀要 第15号 2016 実践臨床心理学専攻10周年記念号	広島国際大学心理臨床センター
次世代教員養成センター研究紀要 第3号 2017.3	奈良教育大学 次世代教員養成センター
東京家政大学附属臨床相談センター 紀要 第十七集 2017年3月	東京家政大学附属臨床相談センター
岐阜大学教育学部 特別支援教育センター年報 第24号	岐阜大学教育学部附属特別支援特別支援教育センター
大阪大谷大学 教職教育センター紀要 第8号 2017年3月	大阪大谷大学教職教育センター
立正大学 臨床心理学研究 第15号 2016年度	立正大学心理臨床センター
佐賀大学教育実践研究 第34号 2017	佐賀大学教育学部附属教育実践総合センター
静岡大学教育実践総合センター紀要 No.26 2017	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
学校現場体験の明日を拓く	静岡大学教育学部学校支援ボランティア研究会
群馬大学教育実践年報 第6号 2016年	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
研究紀要 第44号 平成29年	広島県立教育センター
福井大学教育実践研究 第41号 2016	福井大学教育学部附属教育実践総合センター

教職支援開発センター活動報告(2016/09/16~2017/05/20)

<平成28年度>

10月21日(水) 教育実践集中講座(第二期1回目)
 11月2日(水) 教育実践演習 第六回全体指導
 11月7日(月) 教育実践集中講座(第二期2回目)
 11月9日(水) 教育実践演習 第七回全体指導
 11月14日(月) 教育実践集中講座(第二期3回目)
 11月15日(火) 第七回 専任会議
 11月21日(月) 教育実践集中講座(第二期4回目)
 11月25日(金) 教育実践集中講座(第二期5回目)
 12月6日(火) 第三回 編集会議
 12月8日(木) 教育実践集中講座(第二期6回目)
 12月10日(土) 第二回 公開講演会
 12月12日(月) 教育実践集中講座(第二期7回目)
 12月14日(水) 教育実践集中講座(第二期8回目)
 12月20日(火) 第八回 専任会議
 12月22日(木) 第四回 編集会議
 1月17日(火) 第九回 専任会議
 1月23日(月) 教育実践集中講座(第二期9回目)
 2月14日(火) 第90回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
 2月21日(火) 第一回 教育開発推進部門会議

2月21日(火) 第十回 専任会議
 2月27日(月) 第17回 学部・附属学校園教員合同研究集会
 第一回 実地教育推進部門会議
 3月1日(水) 教育実践集中講座(第二期10回目)
 3月2日(木) 第二回 運営委員会
 3月14日(火) 第十一回 専任会議
 3月21日(火) 第一回 教職支援推進部門会議

<平成29年度>

4月12日(水) 特別支援教育実践演習 全体指導
 4月13日(木) 教育実践演習 第一回全体指導
 4月18日(火) 第一回 専任会議
 4月20日(木) 教育実践演習 第二回全体指導
 4月27日(木) 教育実践演習 第三回全体指導
 5月11日(木) 教育実践集中講座(第一期1回目)
 教育実践演習 第四回全体指導
 5月13日(土) 教育実践集中講座(第一期2回目)
 5月15日(月) 教育実践集中講座(第一期3回目)
 5月16日(火) 第二回 専任会議
 5月18日(木) 教育実践演習 第五回全体指導

教育実践総合研究(第36・37号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第36号は**平成29年11月30日(木)**原稿受付締切、第37号は**平成30年5月31日(木)**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。

査読者については、会議において決定する。

(1) 採 録

(2) 条件つき採録

(3) 返 戻

8 (校 正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。

その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則

本要領は、平成27年4月1日から施行する。

紙面構成の関係上、「退任のご挨拶」「着任のご挨拶」のご挨拶文につきまして、本紙全体の本文の文字サイズに比べ、0.5pt小さい文字サイズにて編集させていただきましたことを、お詫び申し上げます。

なお、本号(第4号)は寄稿原稿の集約ならびに編集の関係上、皆様のお手元に届くまで時間を要しましたこと、重ねてお詫び申し上げます。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 4)

発行日 平成29年6月20日

代表者 七條 正典

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>



CEDS_Tel&URL